

トピックス

支部研修会が亀戸 SC で開催されました

7月18日(土)午後、東京都支部上期研修会が、役員、教室の先生、同アシスタント、合計200名が参加して、亀戸スポーツセンター大体育室で開催されました。小生も研修担当委員の一人として参画させていただきましたが、会場予約については東大島鶴の会(代表鈴木武さん)のお世話になりました。小生担当教室のうち、瑞江鶴の会、東大島鶴の会から8名が参加しました。(写真は藤澤徹師範提供)



閑人閑話

臓器移植、米国の闇・中国の闇

米国での心臓移植が必要な少年の話題が最近新聞やテレビで報じられていましたが、必要とされる費用2.8億円がなんとか善意の募金などによって用意できたとのことでした。ほかにも3.4億円とか、4億円のケースも報告されています。昨年夏やはり沖縄の少年のケースがありましたが、その時は2.1億円とされていました。たしか6~7年前には8000万円とか1億円と言われていたような記憶がありますが、どんどん高騰しているのですね。その費用の内訳がブログに載っていますが、要するに、費用の中にデポジット料(割り込み料)が1.5億円とか2億円とか入っていて、その部分がどんどん高騰しているそうです。

つまり、自国の患者が待機しているところに日本人の患者が割り込んで、先に臓器移植を受けるので、そのための「割り込み料」だそうです。これは“費用”ではなく、移植医療業界が、言葉は悪いのですが、人の弱みに付け込んで、“ぼったくり”をしているだけのものですかね。まさに“地獄の沙汰も金次第”ということなのでしょうか？

臓器移植は提供者がなければ成立しない医療です。とくに心臓移植については、不幸にして脳死状態に陥った方のみが提供者となる可能性を持ち、さらに本人あるいは両親などの同意があって初めて提供者たりうるものです。子供のケースは提供者の発生がさらに稀なわけですし、血液型とかその他の条件の適合性という問題もありますし、何と云っても、他人の不幸を当てにしている“特異な医療”です。

話は中国へと移りますが、ひところ、中国へ渡って移植手術をするケースがよく報じられていました。中国では臓器全般にわたって供給が潤沢だったということです。このことに関して、最近週刊誌にある記事が掲載されていて、なるほどと納得したのですが、その内容を簡単にご紹介します。

『周永康の起訴で使用停止が実現 死刑囚の臓器移植〜中国の最高指導部の一員で、司法・公安を統括して、絶大な権力を有していた「周永康」が巨額収賄、職権乱用、国家機密漏えいの罪で起訴された。この中で、周被告が中国社会の暗部である死刑囚の臓器移植利権にかかわっていたことが明らかになってきた。つまり、周永康が失脚したことによってようやく、“死刑囚の臓器を勝手に移植医療に利用することを禁じることが出来た”ということだ。日本人を含めた外国人が中国に押し寄せ、高価格で移植を受けるため、死刑囚の臓器市場は巨大な利権と化していた。病院や移植ブローカーなどが臓器を獲得しようと思えば、死刑執行を管轄する各地の裁判所関係者に賄賂を贈ること必要で、これらの複雑な利権構造の頂点にいたのが周永康であった。』(1年に数千人も死刑執行される国だから成り立ったビジネスだったのです。)

ご承知のように周被告に対しては、さる6月11日に、「無期懲役、すべての権限の剥奪と全財産の没収」

という判決が下り、本人が上告せず刑が確定しました。裁判も簡単にかつ非公開で終わり、意外と軽い無期懲役の刑になったのは、彼の親分である江沢民元首席を慮っての政治決着だからとか、あるいは逆に、今後江沢民を摘発する際の証人として必要だからとか、いろいろ説があるようです。

ただ、臓器移植について言えば、江沢民が弾圧した法輪功事件で、死刑となった多くの信者たちの臓器が移植に使われるようになったとは前々からささやかれていたのですが、ともあれ我々には想像もつかない中国の権力構造の闇の世界の話ではありません。

さこうべん

左顧右眄 (再開) 【第17話 漢詩に学ぶ・漢詩を楽しむ】

第12回 李白の悲劇 その1

李白とその詩についてはこのシリーズでも、幾たびか取り上げてまいりましたが、いずれも彼の長安時代、つまり玄宗皇帝につかえていたころの作が中心でした。今回は、あらためて彼の生涯を辿り、その悲劇的な結末までをご紹介しますと思います。

李白は西暦701年の生れとされています。生地と出自については諸説あるようですが、西域生まれで5歳のころ、父に連れられて蜀の綿州（四川省江油市）に移住してきたと言う説が有力です。

李白の先祖としては、まず漢代の隴西（甘肅省天水市）の李広があげられます。（いわゆる“隴西李氏”の一族。）匈奴と良く戦った武将として名を遺しています。また、下って西暦5世紀のころ、敦煌あたりで涼という国を興した李嵩（武昭王）も有名です。李白はこの李嵩の9世孫にあるとされています。

これは別の一説ですが、彼の祖父は、唐の太宗皇帝の10番目の息子、紀王李慎の庶子で、武術胆力に優れ、他の李姓の12人の皇族とともに中宗を担いで武則天に対するクーデターを主導したが、ことが漏れて逆に全員が誅殺されてしまいました。（689年、これが契機となって、則天武后が皇帝として君臨することとなった事件）彼らの一族もことごとく僻地に流され、そのうちの一人が李白の父とその家族であったというものです。（こちらの説では“唐朝宗家李氏”の直系となります。）

いずれにせよ、李白は蜀の綿州で育ち、文武両道に優れた、また任侠の徒とも付き合う闊達な青年であったようですが、25歳のころに蜀の地を離れて、長江を下り江南の地を周遊します。このころ作ったのがあの有名な「白帝城を発す」です。

早発白帝城

朝辞白帝彩雲間
千里江陵一日還
兩岸猿声啼不盡
輕舟已過萬重山

早発白帝城

朝に辞す白帝 彩雲の間
千里の江陵 一日にして還る
兩岸の猿声 啼いて盡きざるに
輕舟 已に過ぐ 萬重 (ばんちょう) の山

李白

白帝は四川省奉節にある白帝城のこと
千里先の江陵は湖北省にある長江の港町

30歳のころには年長の詩人孟浩然と出会い親しく付き合い、また、引き立ててもらいます。彼との別離の情景を詠った黄鶴楼【写真上・1998年4月撮影】の名歌をご紹介します。

黄鶴楼送孟浩然之廣陵

故人西辞黄鶴楼
煙花三月下揚州
孤帆遠影碧空盡
唯見長江天際流

黄鶴楼にて孟浩然の廣陵にゆくを送る

故人 西のかた黄鶴楼を辞し
煙花 三月 揚州に下る
孤帆の遠影 碧空に盡き
ただ見る 長江の天際に流るるを

廣陵；揚州の古名

故人；友人のこと

煙花；春霞の中の花々

(以下次号に続く)

今号は2頁建てとしましたので、「アーカイブス雲の手通信」と「旅をうたい拳を詠む」は休載します。

